

排爐湯筆坤

特別
14
1919
209



○柳菴市道草 七冊 又改三年枚上野原
 信元の著りし本邦上古の古蹟傳画の
 類を考證しし所を記し置てありし而して著
 者亦六年の作と云ふ(著者)本邦古史書
 の考證とありし所を記し置てありし(著者)のこ
 とを記し置てありし所を記し置てありし
 余嘗て此書を読みきたるに其の記述を
 りて初め之を誤りしを得たりしと云ふ
 たる二三箇所を訂正し其の古蹟を未
 だ得ずし傳画の考證とありし所を記し置
 てありし

(様) 法隆寺寶物の貴き不以知る
とし之回く古代ノ昔の重宝を
要する不以知る

前記の如く
一、三つと書ふこと
二、行三行づつ、裁断しと散逸せしむる
三、凡とも今あるをいふ
四、せん、鑿金、黄、銀、界の格
五、上喜吉子の御託、太秦切といふ
六、隆寺ノ傳へたる紙を裁断せしむる
七、そんと紙、金、泥、土、塔のし、信ある

また、またもあつし、また、雲母地の唐紙、
赤んりし、また、白地、扇地、細字、
大儀冠の紙、また、毒地、金、泥、青、方、の、紙、
多武、峰、切、といふ、金、唐、草、一、雲、龍、の、下、
信、を、紙、に、か、き、し、あ、つ、白、地、の、紙、
天、皇、の、御、託、と、御、託、金、泥、毒、地、の、紙、
一、七、ち、う、浅、黄、を、紙、白、地、黄、紙、あ、つ、光、
明、皇、后、の、御、託、ハ、紙、代、金、泥、金、界、の、御、
本、す、こ、ハ、金、界、ハ、草、の、泥、信、あ、つ、紙、
二、返、せ、ん、り、初、子、地、の、紙、白、地、浅、黄、
毛、紙、赤、赤、地、の、紙、信、を、教、へ、る

其字より古くは「爰ふふし」又曰く此の碑
の永正六年の書に「見えあること」を
今地の「隆安」に「し」を「如」を「り」得たり
永正六年と「利」の申の時代なり

一 文章のより古典雅なりと「憲法」の石に「い」が
ふし「の」あり「心」を「か」是「上」喜「方」子「卅」二「年」
の「御」所「し」を「後」古「隋」煬「帝」大「業」元
年「の」あ「る」ま「り」漢「魏」の「遺」風「を」追
い「ら」報「の」又「格」を「準」せ「る」一「事」に
ふ「し」

「憲法」の字は漢魏に出たりといふ
「何人非貴」是「法」非「字」

を「不」字の「こ」に「用」り、是「漢」人の「格」なり
史記「陳」平「世家」に「為」相「非」治「事」、ま「り」
「賈」誼「傳」に「漢」法「令」非「行」也と「見」り、又「不」
「字」の「法」を「り」、又「中」に「章」に「君」則「天」
「之」、臣「則」地「之」、之「字」を「助」字の「こ」に「用」
い「る」是「治」治「之」之「命」矣、夫「家」治「之」
「荒」性「命」之「形」骸「之」不「可」易「也」、金「滕」に「禮」
亦「直」之、文「王」世「子」に「冬」に「如」之、史記に「以」
「人」也、膏「為」燭「度」不「滅」者「久」之と「ある」、又「不」
「後」助「也」と「注」し「り」、又「中」に「章」に「上」不「礼」而
「下」非「齊」、下「無」礼「以」為「有」罪、不「字」を「不」字
の「こ」に「用」い「る」、ま「り」肉「秦」の

朝鮮の領土を以て、先づ港外に壯大堅牢なる大
 防波堤を築きて、黄海の怒浪を遮断し、内に
 は幅六十間長一里餘の突堤三條を築き、一
 萬噸以上の船舶を横附けにするを得せしめ
 たり(日本人は棧橋といへば突堤なり)
 船渠の如き未だ落成に至らざりしも、其規
 模の壯大なる七千噸位の船數を併に列せ
 しむるを得べき計畫ありしが如し。陸上に
 は廿五の村落を市制内に編入し、一の中心
 地を設けて十條の市街を開き、魏々たる洋
 館等に發ゆる光景は歐洲諸國の大都會も之
 には過る能はざるべく見たり。但し露軍
 敗退の際自ら焼き去りたるを以て、今は完
 全なるものは少なく、煉瓦の骨のみ残りし
 上にトタン板を覆ふて後に人の住居す

〇表面極多なるるを以て、其規模の壯大なる實に驚くに
 堪へたり。旅順の經營に至ては更に驚くに足るべきも
 のあり。當局者の談に據れば、遼國は青泥窪
 の經營に五億圓を抛ち、旅順には更に十
 億圓を投せりとの事なれば、其經營の大
 は之に依ても察するを得べし。但し青泥窪
 の經營は一見して知るを得べきも、旅順は
 然らず、新舊市街を圍める波濤狀の山巒に
 は其起伏の形勢に據りて永久築城的の砲臺
 砲臺を築き、其胸壁に掩へる鐵板の厚さは
 世界最大艦の甲鐵に二倍乃至三倍せるもの
 ありといへる一事にて、其堅牢なること
 を察すべし。去れば遠きより之を望めば若
 石壁として一草一木なき香山、生産上よ
 り見れば一文の價なき平々たる凡山も、實
 は數百萬乃至數千萬圓の價を有せざるもの
 なし。露國は經營の初より外國人には
 遠鏡を用ひしめず。又た高きに登りて展望
 すること許さざりしが故に、今日まで其
 真相を詳に知るを得ざりしといふ。

滿洲に入つて第一に目を驚かすものは露國
 が經營の壯大なる事なり。青泥窪に英佛連
 合軍が始めて船を繋ぎし處は柳樹屯附近に
 して、今の港内は風波荒くして船舶を碇泊
 せしむる能はざりしに、露國の青泥窪市長
 サワロフは工兵少將にて、土木に精通せし
 人なるを以て、先づ港外に壯大堅牢なる大
 防波堤を築きて、黄海の怒浪を遮断し、内に
 は幅六十間長一里餘の突堤三條を築き、一
 萬噸以上の船舶を横附けにするを得せしめ
 たり(日本人は棧橋といへば突堤なり)
 船渠の如き未だ落成に至らざりしも、其規
 模の壯大なる七千噸位の船數を併に列せ
 しむるを得べき計畫ありしが如し。陸上に
 は廿五の村落を市制内に編入し、一の中心
 地を設けて十條の市街を開き、魏々たる洋
 館等に發ゆる光景は歐洲諸國の大都會も之
 には過る能はざるべく見たり。但し露軍
 敗退の際自ら焼き去りたるを以て、今は完
 全なるものは少なく、煉瓦の骨のみ残りし
 上にトタン板を覆ふて後に人の住居す

〇表面極多なるるを以て、其規模の壯大なる實に驚くに
 堪へたり。旅順の經營に至ては更に驚くに足るべきも
 のあり。當局者の談に據れば、遼國は青泥窪
 の經營に五億圓を抛ち、旅順には更に十
 億圓を投せりとの事なれば、其經營の大
 は之に依ても察するを得べし。但し青泥窪
 の經營は一見して知るを得べきも、旅順は
 然らず、新舊市街を圍める波濤狀の山巒に
 は其起伏の形勢に據りて永久築城的の砲臺
 砲臺を築き、其胸壁に掩へる鐵板の厚さは
 世界最大艦の甲鐵に二倍乃至三倍せるもの
 ありといへる一事にて、其堅牢なること
 を察すべし。去れば遠きより之を望めば若
 石壁として一草一木なき香山、生産上よ
 り見れば一文の價なき平々たる凡山も、實
 は數百萬乃至數千萬圓の價を有せざるもの
 なし。露國は經營の初より外國人には
 遠鏡を用ひしめず。又た高きに登りて展望
 すること許さざりしが故に、今日まで其
 真相を詳に知るを得ざりしといふ。

次に東清鐵道の大規模なるにも一驚を喫す
 べし。敷地は遼國の地を無代に使用したる
 が爲か、出來得るだけ多く取りしと見ゆ、
 線路の如き軌條の左右壯大なる空地を除き
 し、其幅は五十間もあらんと思はる。停車
 場は青泥窪と哈爾濱とを一等、遼陽を二等
 大石橋瓦房店等を三等とせしが、其經營の
 大なるは、二等なる遼陽停車場の敷地百二
 十五萬坪内に二千の洋風家屋を有すといふ
 にて、知らるべし。但し其經營は官宅の經
 營ともいふべく、プラットホーム及倉庫
 等は極めて壯麗なるものにて、人目を驚か
 すものには掛員の官宅と備兵の營舎なり。
 旅順背面の禦臺堅牢なるは所謂難攻不落の
 ものにして、日本兵いかに勇猛なりとも、
 到底強襲を以て當るべからず。之を陥れむ
 と欲せば、是非とも正攻法により、坑道を
 掘鑿し、進むの他なかりし。此の坑道作業
 の困難なる、旅順一帯の山稜は凡て石英質
 の(燧石の如き)の硬岩より成れば、之を掘鑿
 するに容易ならざるに、見渡す限り起伏

朝鮮の領土を以て、先づ港外に壯大堅牢なる大
 防波堤を築きて、黄海の怒浪を遮断し、内に
 は幅六十間長一里餘の突堤三條を築き、一
 萬噸以上の船舶を横附けにするを得せしめ
 たり(日本人は棧橋といへば突堤なり)
 船渠の如き未だ落成に至らざりしも、其規
 模の壯大なる七千噸位の船數を併に列せ
 しむるを得べき計畫ありしが如し。陸上に
 は廿五の村落を市制内に編入し、一の中心
 地を設けて十條の市街を開き、魏々たる洋
 館等に發ゆる光景は歐洲諸國の大都會も之
 には過る能はざるべく見たり。但し露軍
 敗退の際自ら焼き去りたるを以て、今は完
 全なるものは少なく、煉瓦の骨のみ残りし
 上にトタン板を覆ふて後に人の住居す

せる不山のみにて、草木の生ずべきものなれば、纒に土囊を盛りて身を隠し、之を起點として開撃を始め、敵の攻撃を避くるが爲、主として夜間作業に依る。其苦心は到底想像の外にあり。而して其坑道の土は厚板を以て之を覆ひ、其上更に土石を以て之を覆へば、銃丸散弾は之を穿て得べきも、榴弾之中れば破壊を免かる能はず。勇士敵弾に觸れて死する像、翌朝の存するあれど、脱糞の爲めにやられては醜たるを免かれず、セメテ脱糞中だけに危険なからしめんといへば、其外は、は某將軍の語る所なりしよし。脱糞中だけは危険なからしめんといへば、其外は、坑道中なりとも何時身命を失はんも知るべからざりしを想ふべきにあらざるや。かくして右に折れ左に曲り、一曲一折して其坑道を敵砲臺下に導くや、始めて爆薬を敷く事なり。其爆薬の量は、銅鑄砲を撃沈する大砲若くは水雷は、多きも七十基に過ぎざるに、二龍山に用ひし爆薬は實に

二千七百基（約我七百二十貫）に及びたり。此爆発にして一び爆発せむか、萬雷一時に激して地軸を震盪し、壘内の敵兵は砂石と共に空中に飛散し、恰かも人の體を打つが如し。悲壯絶何とも言語に形容し難しとぞ。之を要するに旅順の攻撃は人工を以て到る處に磐梯山の噴火を起さしめて、かに敵を屈せしめたるなり。兒玉大將曰く「沙河の方では何門の大砲を分捕つたなど威張つて居るけれど畢竟旅順を見ないからのだ。旅順では人間の雨を降らして居る」と。旅順の砲臺は自ら爆破したるもあれば、我が砲臺の爲めに撃破せられしもあり。爾れは水底に沈みしものは纒に一艦にて、他は淺處に居りしものは身を露出し、艦を沈めし。財部海軍中佐は此分ならば修理して用ゆべしとの意見に多しと語りし由。但だ旅順港内の大船渠は工事に手を着けしばかりにて陥成し居らず、中なるもの小なるものにては戦艦を容るゝ能はず、此に日當惑する

といふ人もあり。滿洲の寒氣は意外に鋭く、兵士は大抵外套を用わず、滿洲丸の一行も、毛皮の重き外套を携へしが、終に一の厄介物にて了りし程なり。土人の言には四十年來無き暖氣なりとぞ。我兵に取りては、天祐の一なるべし。滿洲軍の給養は意外に良好にして、全く間然する處なし。不足なるは飲料水のみ。滿洲丸一行が去る七日旅順に赴く途中長嶺子に抵りしに、停車場前の原野に一群の捕虜の後送せらるゝに逢へり。或は荷物を負ふもあれば、手にするもあり、或は立つもあり、座するもあり、或は整列して我が監視兵の點檢を受けるもあり。殊におかしきは一人の日本兵士叛様のものに水を盛り捕虜の口に注ぎ入れつゝ持ち廻るものあり。初めは水を飲ましむるものと思へしに爾にあらず、捕虜は其口に受けたる水を両掌に移し之を以て面を洗ふにぞありし。蓋し洗面器なく且つ水に乏しければなり。

沙河方面の川形は一望すれば茫々たる一大平野の如くなれど、丘陵起伏して波濤狀を成し、塔山三塊山など處々に崛起す。されど此等は東京に於ける愛宕山ほどの高さに過ぎざれば、多く展望を遮るに至らず。然るに兩軍は皆な散兵隊を撃つて上に木石を覆ひ、家を有するものは旅團司令部以上にして、旅團本部以下は皆な穴居なるが故に、沙河を挟むて日露兩軍五十餘の大兵は那處に在るか知るとを得ず。野津大將は滿洲丸一行を顧みて「諸君の目には二萬か三萬の兵に見えまいけれど、是でも〇〇〇の兵があるのだよ」と語られしよし。攻圍軍の某聯隊長曰く、旅順防備の嚴なるを、敵兵の頑強には流石の我兵も一時は持たず、士氣沮喪して甚しきは自から傷つけて後送を願ふものあるに至り、大に憂慮せし折柄、内地より寄贈の毛布其他種々の恤兵品到着し、之を軍中に頒らし兵士の歡喜は非常のものにて、我が國民が巨多の軍費を負担せし上に、斯くまで心配しける上は、

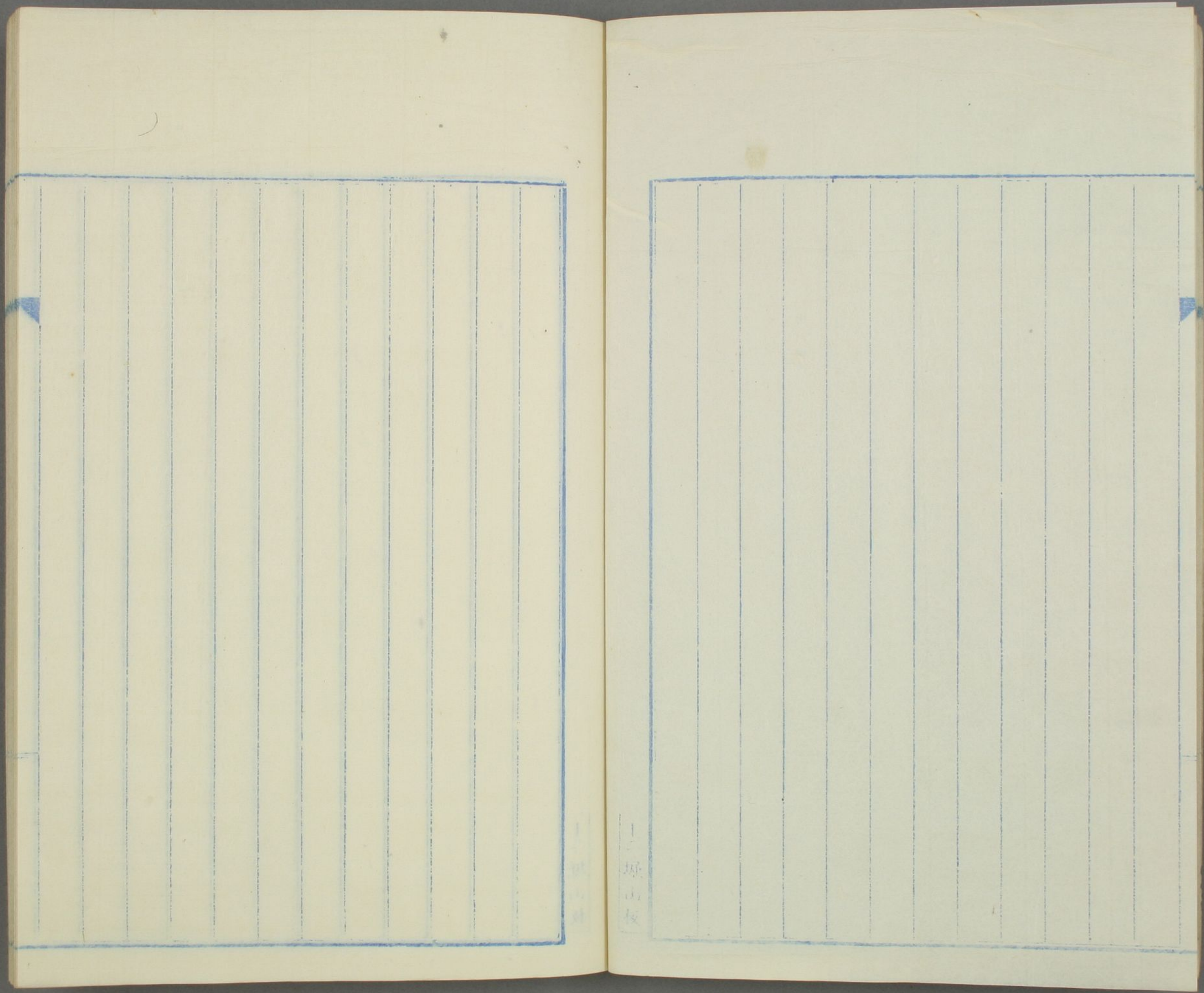
士氣頗に振ひ、遂に頑強の敵を屈せしめたりと語り、沙河の陣地にも到る處に恤兵品の土氣を鼓舞する大なるを補し、各將軍より懇なる謝辭を受けたるよし。後援の必要なる此の如し。國民の大に注意を要するものなり。云々。

旅順の戦況は如何なるに
二十、八、時砲を元了
旅順の戦況は如何なるに
二十、八、時砲を元了

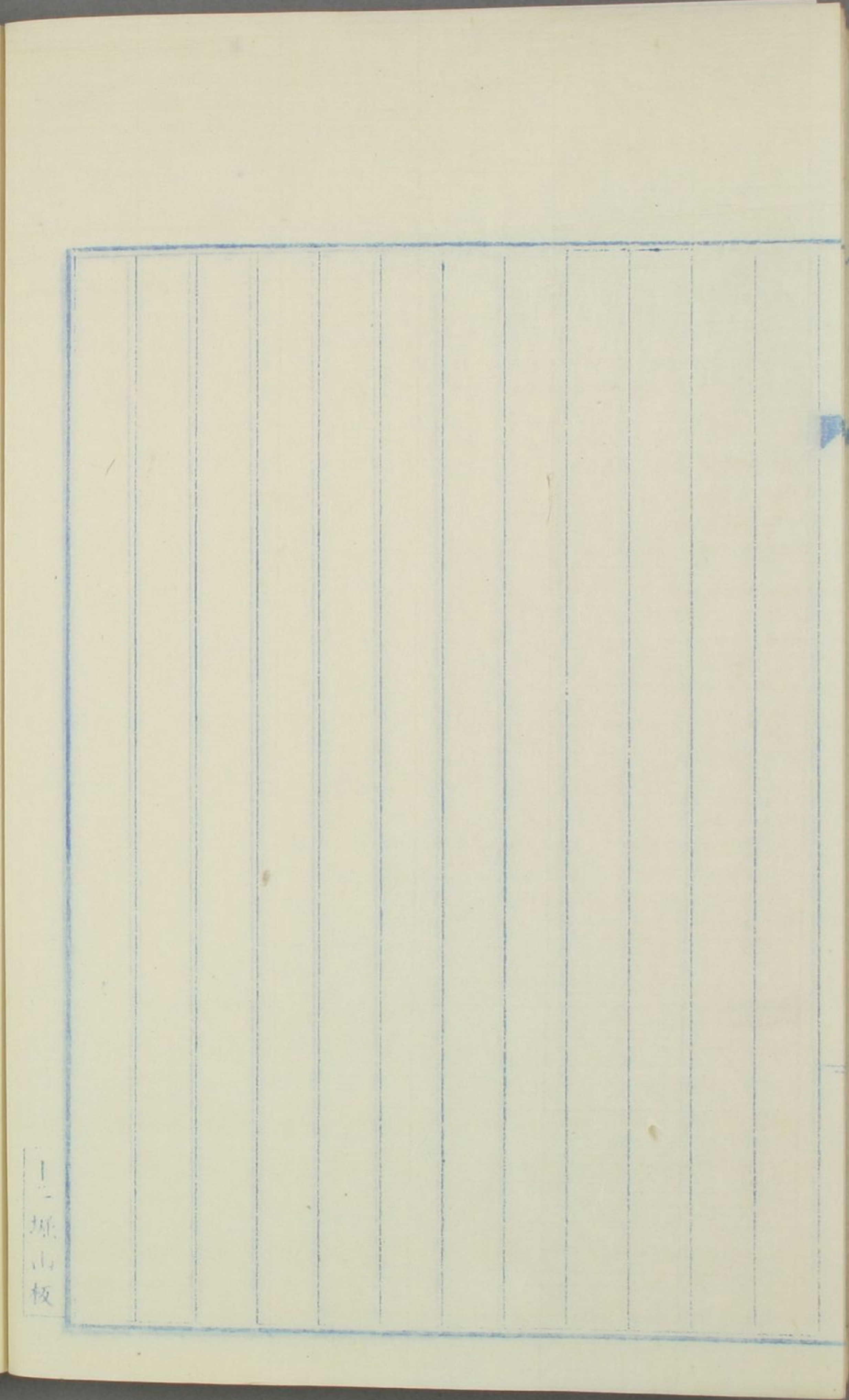
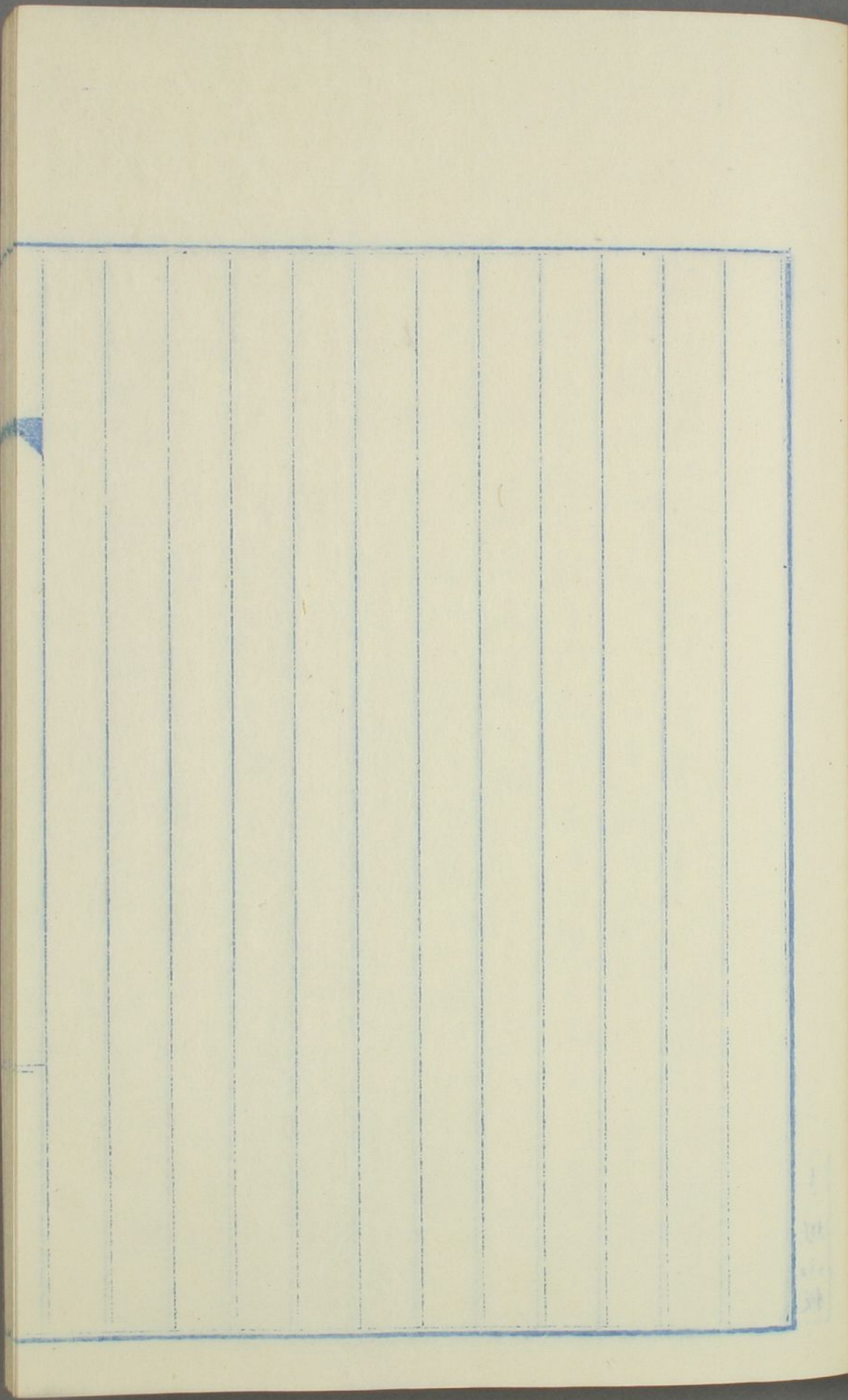
福元さん

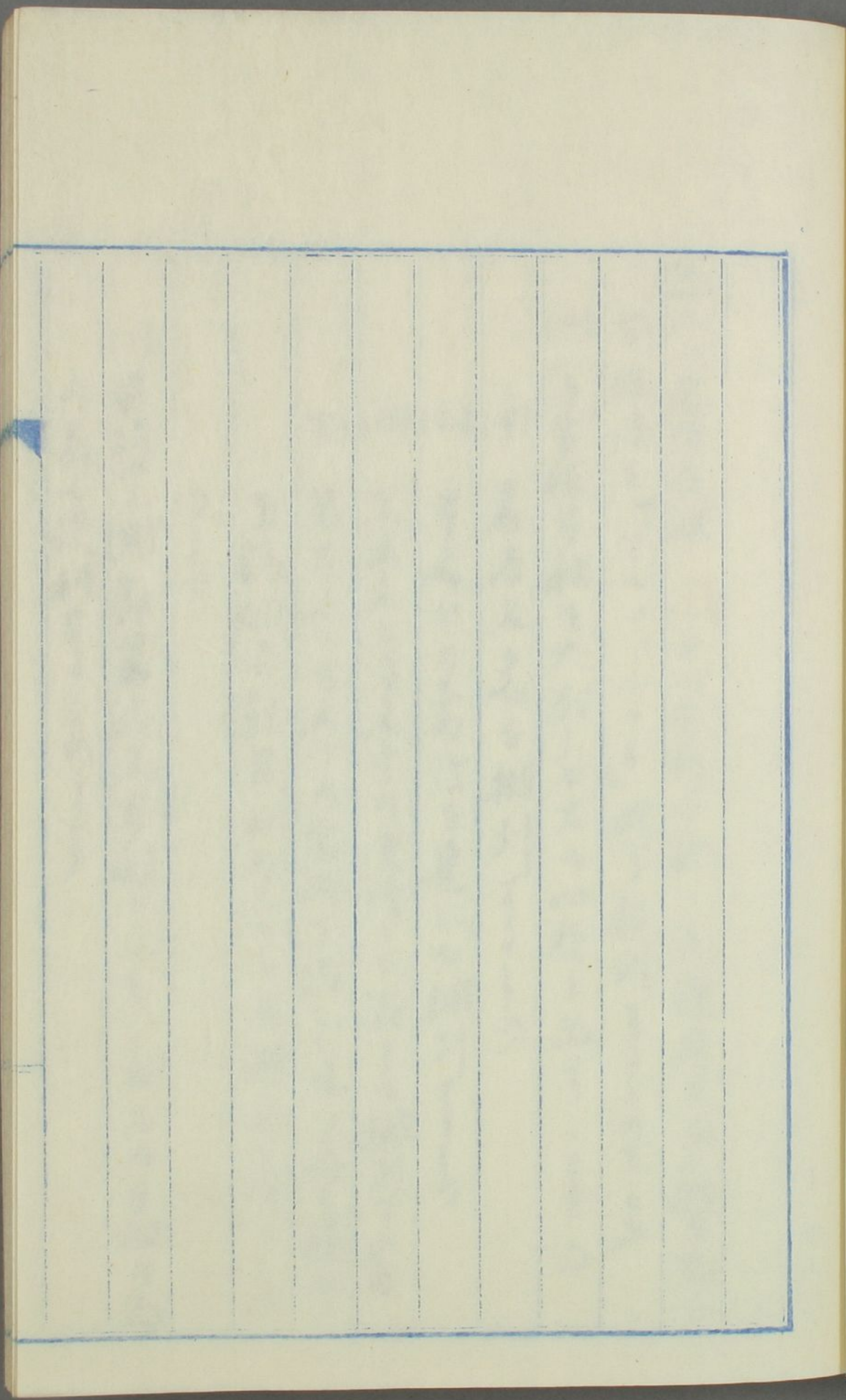
たが、受けは背はるりも、うらなつてきこせうのふあ
そつふ、備し朝鮮、こまを方、子探るるる、
困る、とるを誰んうとそあ、國王のある、海とこの
とあを殺さん、限うあるる、賄とあ、大の
ぬおと来こそるる、日本のあること、時ふ、國王
こゝ、海とある、えん、現自在、未来の大陸
碍ある、何ん其由、交分をし、呼うぬ、ぬ
ひあうう

○

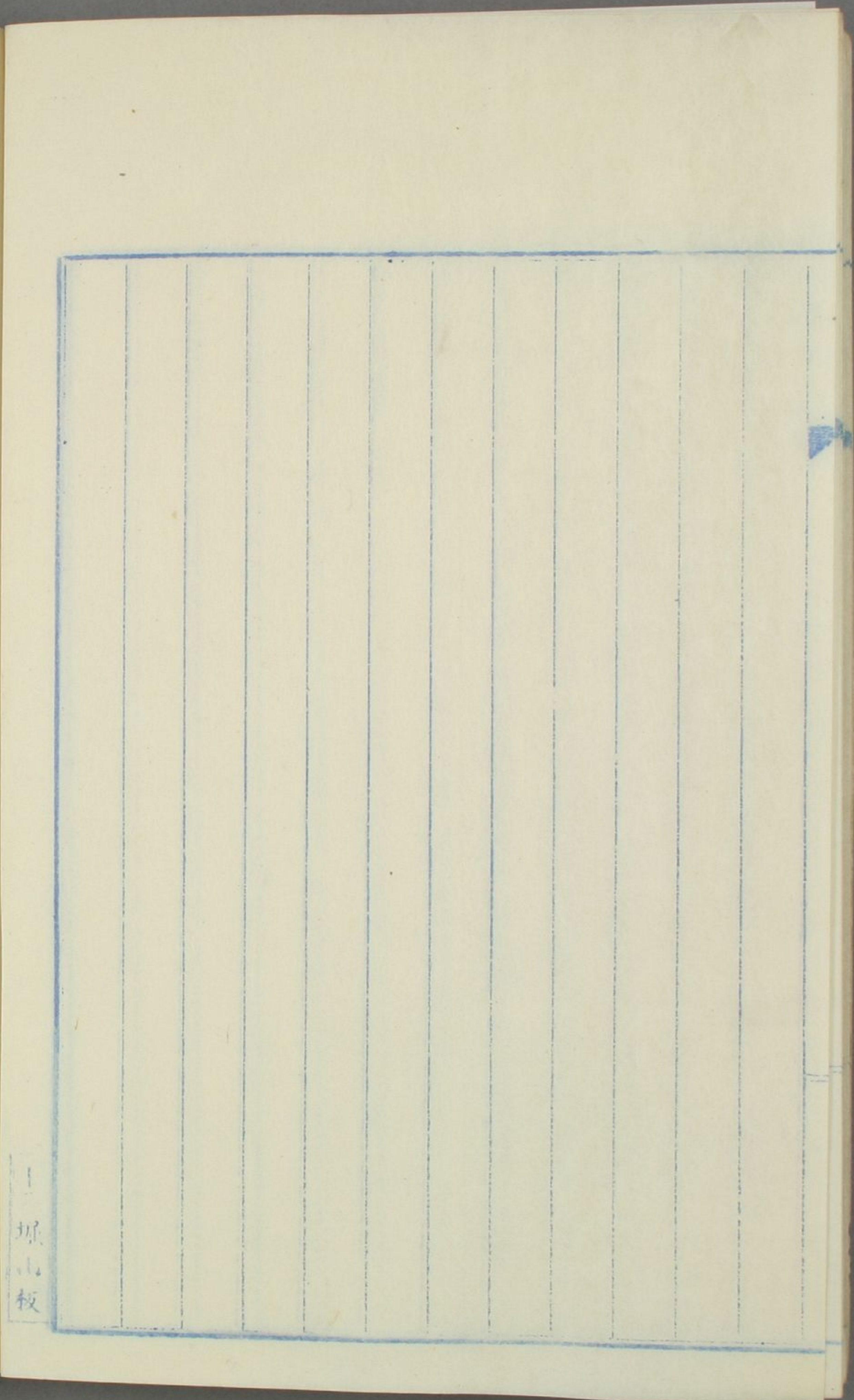


一
二
塚
山
板





堀山板



(一) 著者体目録 (一) 著者体目録とと論対ふふを為さ
か後体よりアルフアベツト順に排列するものを云ふ

(二) 著者体目録を大おし左の四行と為すことを云

(甲) 著者名を排列するもの

(乙) 著者名中の要語を並べに排列するもの

(丙) 著者名と著者名の要語とを混して排列するもの

(丁) 著者名と著者名中の要語とを混し且つ之を補つ

系統的な目録の形式に改題目を以てし

この

(三) 前項中(甲)即著者名目録に主として左の目的のため
最も便利とするものとする

(1) どの著作の圖書の著者名と題名と校書
すゝもの

(2) 誰々の著述中、何々の圖書ありかとのこと
校書ありきもの

(3) 本二項中に即ち書名中の要所をも選んで排別
するものとするものたるものたるもの

(4) 著者名未だわが著者のみ記憶しとあるもの
ゆゑ

(5) 著者名、著者名未だわが著者のみ未だわが著者の
標準としてあるもの例は

Shakespeare's History of the Human Race -
origins and History of the Human Race

origins 著者名未だわが著者のみ未だわが著者の
記憶せしめるもの

(6) 著者名未だわが著者のみ未だわが著者の
或る要件のみと標準としてあるもの

本目録に左の場合の意をすることとする

(7) 本二項中の何即ち誰何の著述あり、何の
やの問題

(8) *Poetry in Shakespeare's Plays* : *Shakespeare's Drama*
題「何とあるは」

man 或 *Schubert's Dramatische Werke*
詩とあるは

二 分類目録

(一) 分類目録の性質及其目的

(二) 分類目録の性質

(三) 分類目録の形式

(四) 分類目録の欠点

(五) 圖書分類法

(一) 圖書分類の標準

(二) 圖書分類の形式

(三) 文体別分類 形式別分類

(四) 件名別分類

(五) 系統的分類

(一) 便宜的分類

(二) 圖書分類の方法

(一) 初期分類法

(甲) 十進分類法

(乙) 糊卷分類法

(2) 最新分類法

オ一

(一) 分類目録の性質 分類目録とは、一定の範囲内の圖書

書と同一の位置を占めることにより、整理し、編纂する

たるものなること

(二) 分類目録の形式 分類目録をたつたの形式をたつた

のちをみる

(a) 漢字をある或る一件を以てその例として用いる

(b) 一つの例を以てその例として用いる

の場合

(三) 例題の欠点 例題の欠点

(a) 例題の簡明でないこと

(b) 例題の目的を明瞭に示していないこと

(c) 例題の目的を明瞭に示していないこと

困難な事

(c) 目的が不明瞭であるとき

(d) 例題の目的が不明瞭であるとき

(備考)

例題の目的が不明瞭であるとき

例題の目的が不明瞭であるとき

甲、英佛獨伊西蘭等の羅漢文字あり

乙、ペルシヤン、トルキツニ等のアラビック文字あり

丙、ヘブリニー、サンスクリット、希臘、西露西丑等の

各特別文字あり

以上の中(甲)のみを之を打混して単に英漢の字母
順に排列するは差し不都合を生ぜざるも(乙)(丙)
の異るるを其順の異るるを同字として其音
の異るるを右方として其音の如く左方として
書き如くありて一ききもつては時代より非換
者きの方を異るるものへあるべからざるを
決(文)其儘を以て其母順の儘に記し
不可能なる属す此例に依りて其目録編纂

上元向う控り免えたるものなり

(2) 文体別分類 文体別分類ハ一ツに其式別分類と

稱すその一として其圖書記載の目的を問はず

単に其形式即ち文体に據つて分類するものとす

例ハ小説文散文と別り若くは記述論説的

叙述等におつてを云ふ

此等の文体別分類を以て之を以て文を考ふるに因ら

ざるも之を他の記述を以て推し其理を以て用ふる

ことと却ては複数を表し其意を盡すに

果を以てする

(3) 件名別分類 件名別分類とは其圖書の

國語記載等の何れを以て其記載せしむる

事項(目的)を掲げたるを云ふ

件名別分類は他の言語にお、文体お等と異なり其
如何なる程かゝるも精細なるを許し得る所あり
最も確定的(デターミナテド)なるもの
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

件名別分類を大別して右の二種とすることを

(甲) 系統的な分類

(乙) 便宜的な分類

(甲) 系統的な分類 とは圖書の件名を一切系統
的、階級的な分類とするを云ふ
例(一) 社会科学のありては、政治、法律、行

術、商業文書、風俗等をとりまき、又法律
の下に民法、私法を置き、民法の下に 國際法、
憲法、刑法、行政法等、私法の下に 民法、商
法等、又民法の下に 契約、物権、債権等
をとりまき

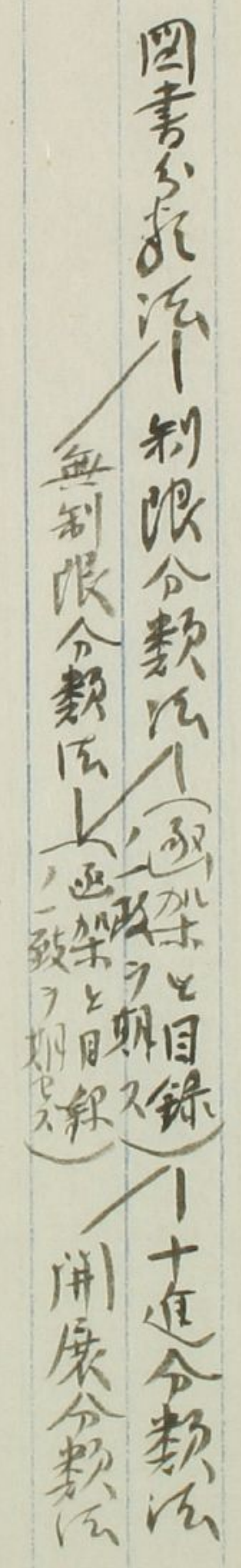
(乙) 便宜的な分類 とは其件名の系統ある物

が其圖書の性質大小を以て圖書の集
まり方等を依りて便宜なる分類をするを云ふ
例(一) 心理学の下に 論理心理学、倫理学を互
く心きを純正心理学、論理学、心理学、倫理学
等とすし之を並立せしめたり、社会学の下に
ありては、社会学を以て心理学の下にあり

べき心理などを合併し教育心理を二部に分け
また社会学の下に統計学を設け、統計学を
更に分けて政治学の下に統計学を、社会学を
経済学をそれぞれに分類する

(二) 圖書分類の方法

圖書分類の方法を考へば左の如し



(一) 制限分類法 ことごとく事務の分類の標準を数に

的制限し専ら物理的の分類するものも函架
排列法として必ず此方法の標本も目録上の分
類法として未だ必らずしも此方法の標本も目録
上の非なるものを行す

(備考) 函架の分類排列法を適用する場合は
必ず記簿の通付も必要とするものなり
物理的の分類の標本も必ずしも必ずしも其分
類の標準を細考するものとすべきを言ふは上
の所便りである

制限分類法中には必ずしも函架と目録を併用する場合は
あるものなり即ちデューイ氏の十進分類法及び
タークの開架分類法も之を概説する

甲) 十進分類法

十進分類法 (デシマル・システム)

ラシキケイロシヨシヨシ) ととき先づ圖書を九部つて
から一から九迄の数字を以て記號を付し
更なる之を九門に分ち一から九迄の数字
を以て其記號を以て又更なる之を九門に分
つ

此方法と又記號の位を以て見ると
さうな似たりとも記號萬般の事項を以て
さうな九の数字を以て判別するに
入るる窮乏を免れざるは其を以て
見くめざるは其と校する事の利便

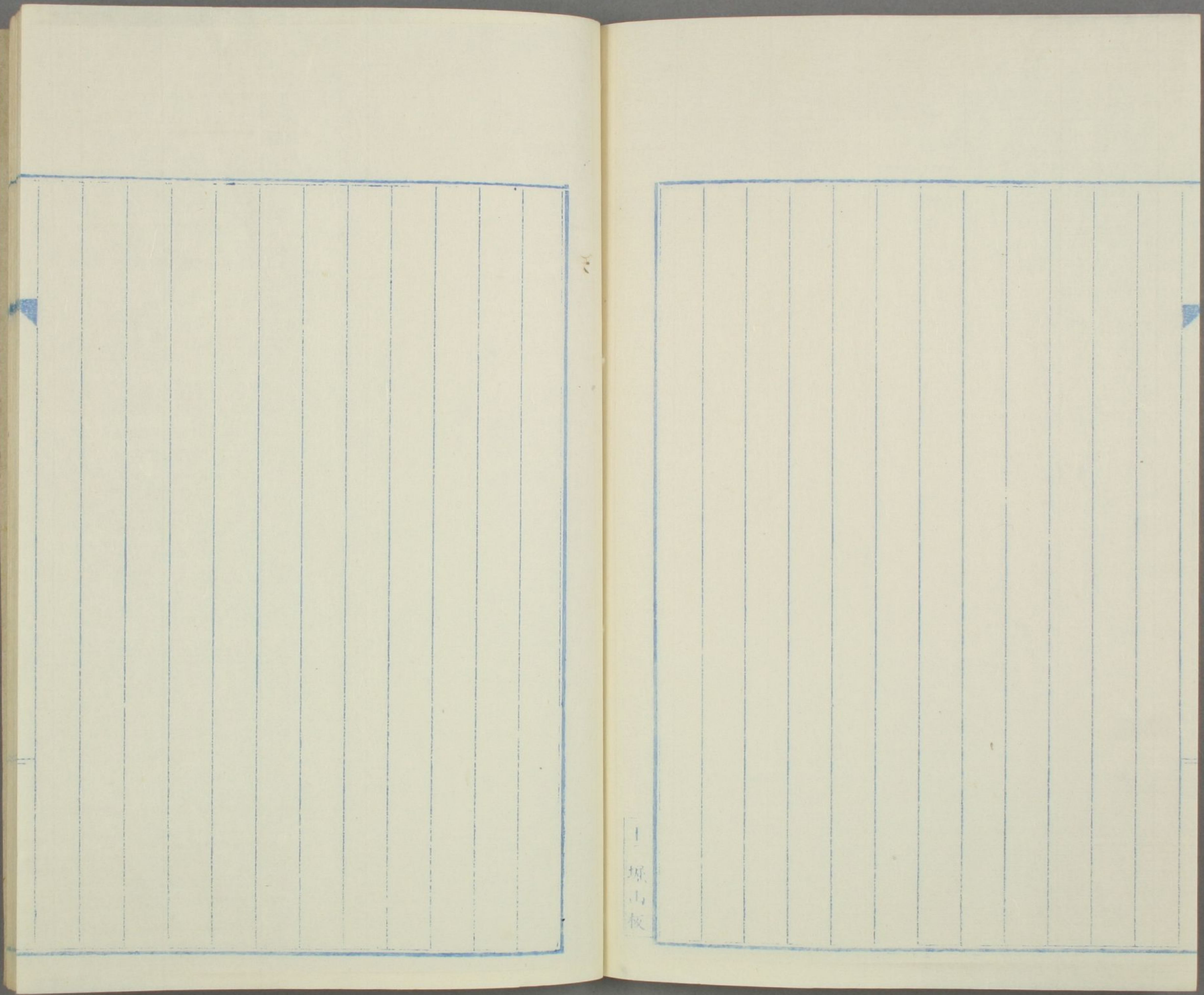
お書きの粗観するゆゑ多きを免れさうな
とす

乙) 用字分類法

用字分類法 (エクスパンション)

ソラシキケイロシヨシヨシ) とす即ち前に十進分類法
の数字に代りて ABC の文字を以てさ
るゝさうな記號を以て九の数字をも文
字を以てさうな記號を以てさうな
用字分類法の用字を以てさうな記號を以て
さうな記號を以てさうな記號の差を以て
さうな記號を以てさうな記號の差を以て
ハヤとを得す

上記二法の多きを以て圖書を以てさうな記號を以て



一
城山板

○四月十七日分のこの校報を印刷するに
きつての報先を油畫の上作つた、その
ハズの如くいふ

図書館

(一) 構造

本校視察校舎の結果として、その
五年に、新築するに本館の建設を考
へば

- 一本館現在校舎内 九十二坪八合

書庫

五十四坪

読書年并書数

百三十八冊八合

より而して在りの書年を以て煉丸送三層樓を以て優
入二十有餘葉冊の圖書を以てを以てを以てを得て
又読書年を以て書数とせし木書二階建の由
ありて樓上樓下の二階を併用するものあり凡そ
六名名の送書者と定るべきなり

(二) 圖書

明治十七年八月二十日調査より得たる書数及び
本年かゝる増加の圖書数及び其種別代價
等を示せば

一 蔵書総計

二萬三千九百四十九部

五萬三千三百六十二冊

内訳

洋書

八千九百七十九部

一萬二千四十四冊

和漢書

一萬四千九百七十一部

四萬千三百十八冊

一 本年か増加圖書総数

三千六百四十九部

八千八百七十八冊

内訳

洋書

千二十四部

千六百七十三冊

内

購求

七千九十九部

千三百六十七冊

(以上諸部は二十二部七十七冊を以て合す)

和漢書 二万二千五百 三万六册
二千二百二十五册 七千二百五册

内

購求 八万四千五百 四千九十八册

(注) 延徳 九十九卷 七万九千五百册 (全)

奇蹟 千七百八十三册 二千七百七册

一 本年分の所収圖書代價 全六万五千九百九十四元八角

内

購求洋書 全三万二千七百三十四元八角

全 和漢書 全一万三千二百七十四元八角

全 洋書 全三万七千四百九十三元

一 延徳

寄贈洋和漢書 全一万五千八百三十四元七角

予と以て更々前記を著し、右も多数のよめり
り吹次を列記するは

洋書 文字 歴史 経済 政治 法律

政治 文学

和漢書 法律 歴史 文字 政治 経済

政治 地理 文学 文学

と本より入る所を辨入るは、この圖書をよめり
く此に於て、右も、このよめり

(三) 読説事項

圖書閲覧者の最も困難を感する借出書類

の投票の便をんらみ前年と来期を較べ記し来
 りかし、目録を録由誌版の事如表記を
 先くるとせる大に其面目を改め読後を
 多大の便益を與ふを以て其数増え増加し
 隨に貸出圖書の種々前年と比し或る所の増加
 を認めらるる

- 一 本年の閉館日数 二万五千一百
- 一 全 読後人員総数 十二万二千八十五人
- 一 全 一日平均 四百八十二人強
- 一 全 貸出圖書総数 二十三萬七千三百四冊
- 一 全 一日平均 九万四千四百冊強
- 一 出納最も多キ圖書ノ種別

文学 法律 歴史 経済学

政治 宗義

一 読後人員并に貸出圖書ノ最も多キ月

五月 読後人員 一萬八千六百一人

貸出圖書 三萬一千五百二十七冊

六月 読後人員 一萬六千三百三十九人

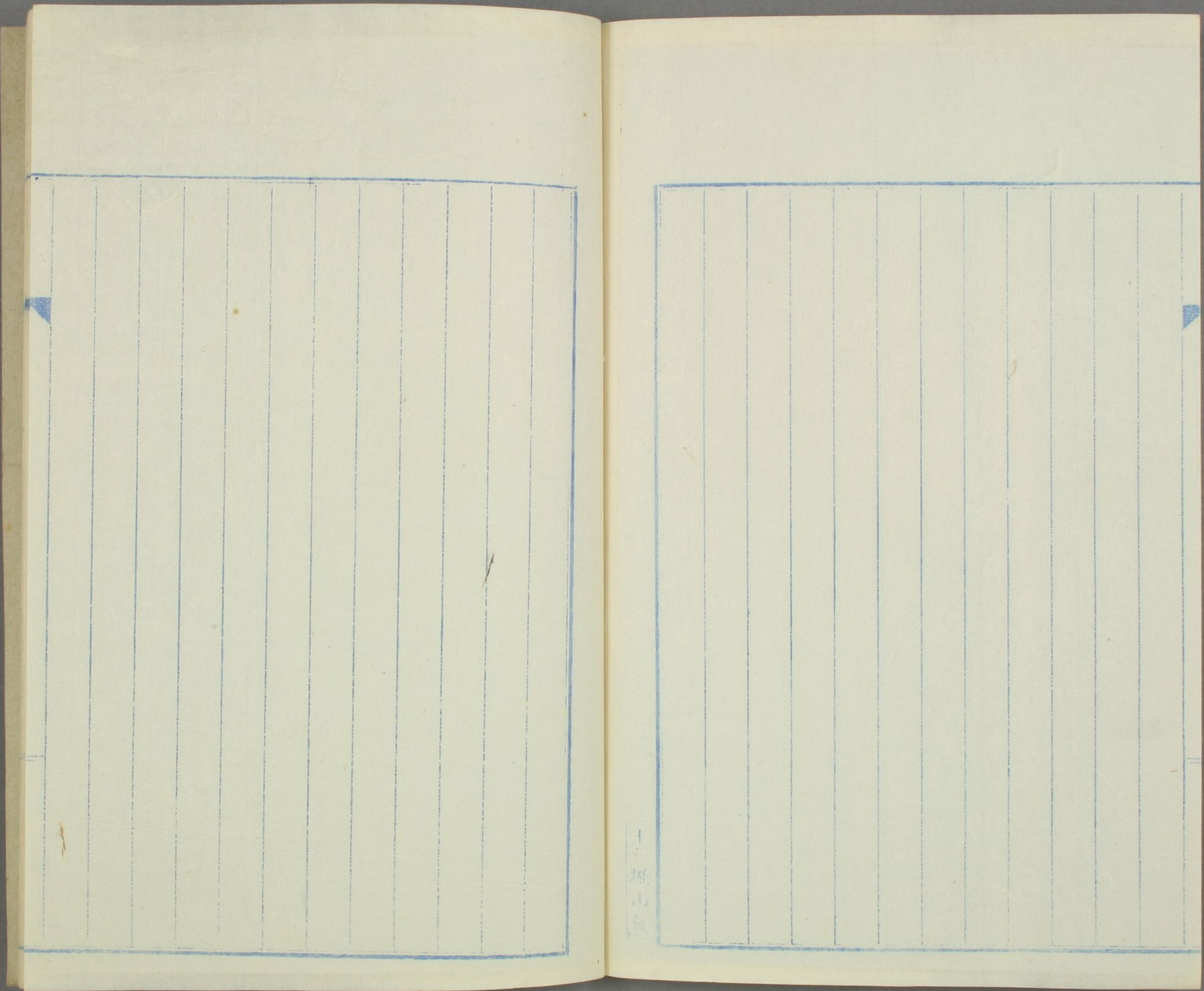
貸出圖書 二萬八千六百七十七冊

十月 読後人員 一萬六千九十六人

貸出圖書 三萬三千五百六十三冊

更なる考考のなる前年とと對照するに凡そ
 七

開校人数	一日平均	貸付回数	一日平均
前年分 一八四日	二五一日	増	増
本年分 二五一日	二五一日	増	増
増減	増減	増	増
比較 六七日	七〇、二五四人	二〇、四七	一〇〇、四九二冊
			二五〇冊



山
山
山

以下全て

白紙

明治三十八年
一月念日
起筆
才彦
阿人